

『古事記』 軽太子に共有される概念

——「下」「人」の分析を通して——

後山智香

一、問題の所在

二、軽太子に「下」と歌わせることの意味

三、軽太子における「人」

四、分析を通して見えてきた軽太子

軽太子をめぐる物語は『古事記』中でも、特に悲劇の様相を呈した物語である。密通からの皇位争い、その敗北・流刑、最後に軽太子と軽大郎女の心中が描かれ、その抒情性について様々に論じられてきた。それらの多くは、歌謡物語と呼ばれ『古事記』中最多の十二首もの歌謡を読み込む当該物語において、多くの歌謡と散文部がどのように連結し、歌謡が物語の中でどのような働きをするのかを中心としたものである。それに伴い、密通の露見・非露見等の、物語内容への新しい解釈・分析なども行われてきた。

小稿では物語の最初に据えられた歌謡七八に詠まれる「下（斯多／志多）」とそこから導き出される「人（比登）」を中心に分析する。その上で、『古事記』は上代に共有されていた「下」という概念を物語の中に取り込み、物語の一環として機能させていたという答えを導く。

一、問題の所在

軽太子をめぐる物語は皇位争いと心中の物語としてその存在を知られており、また、その物語の中に十二首もの歌を詠みこむ^①、いわゆる歌謡物語と呼ばれるもののひとつである。允恭天皇の崩御後、軽太子は同母の妹である軽大郎女と密通し、その後、人々に背かれ穴穂御子との間に皇位争いが起こる。敗北した軽太子は伊余に流され、その後を追った軽大郎女と共に亡くなるというのが物語の概略だ。

近親婚という特異性や歌謡物語という特色を有し、また『日本書紀』では允恭紀と穴穂紀にまたがって記載されているため、様々な観点から論じられてきた。

そもそも密通の露見による人心離反によって、皇位争いになったとこの物語は解釈されてきたにも関わらず、このような解釈で臨む場合、捕えられた後に歌われる歌謡八二との間に矛盾が生じてしまうとされてきた。それは皇位争いに敗れた後、捕えられた軽太子が軽大郎女に歌謡八二で「甚泣かば人知りぬべし波佐の山の下泣きに泣く」と歌い、まるで二人の関係の露見を恐れるような歌を歌っているためだ。そのため、独立歌謡を取り込んだ「物語」という解釈を加えることによって、その矛盾とも見える齟齬が放置されるという形で研究史は進んでいく^②。

こうした流れに決定的な衝撃を与えたのは、「おかしい」のは歌なのだろうか。「おかしい」といわざるをえなくなるような物語展開の把握」を問い直すべきと断じた神野志隆光である。神野志は『古事記』における軽太子をめぐる物語の解釈に大きな見直しをせまった^③。

『古事記』は恋愛の成就を歌う七九歌謡の後に「此は、夷振の上歌ぞ。是を以て、百官と天の下の人等と、軽太子を背きて、穴穂御子に帰りき」と続け、直接的に密通の露見を語る言葉を持たない。そこで神野志は「是以」の用法に着目し、この言葉の意味するところを「即位にいたらないところで、ということをつなぐものであり、密通と皇位争いは同時並行的に進行しているものであり、密通は露見していないとした今までにはない新しい解釈を提示する。この解釈は、様々な反論や反響を齎すこととなったが、神野志の視点は揺るがず、新編全集でも考えは一貫したものとなっている^④。

神野志が指摘するように「物語展開の把握」は重要な点であり、それに関しては身崎寿も「矛盾・撞着をもふくめひとつの統一的な「作品」としてよみとく努力が要求される^⑤」と一定の理解を示している。だが、身崎は神野志が指摘する「是以」は前段との因果関係をつねに指すものではないとする分析に対し、「是以」は『古事記』の「是以」

はそのうける範囲の大小はあつても先行部分の叙述をうけてつぎの叙述にかかわらせることば」としており、軽太子の密通は露見したという結論を見出している。

これらの論を引き継ぐ形で発表された大浦誠士『古事記』軽太子歌謡物語の「読み」―テキスト構造の問題として―^⑥は次のように述べる。

無理に所伝と歌謡とを整合的に読もうとするとしたら、やはり逆に、歌謡物語のあり方の分析を飛び越えて、方法論が先行していると言わざるを得ないだろう。

とし、研究史で見出された論争を批判的に受け継ぎ、方法論ありきでの分析結果に対する疑問を提示している。例えば、軽太子の物語の中で詠まれた全十二首の歌謡は軽太子と軽太郎女による密通と、皇位争い、心中という結末へと導く三部にわけられる。^⑦その物語及び歌謡を時系列にそつて分類すると次のようになる。

七八、七九…… 密通・兄妹婚
八〇、八一…… 皇位争い
八二、八三…… 軽太子捕えられる
八四、八五…… 軽太子伊余に流される
八六…… 流される軽太子に太郎女が詠む
八七…… 太郎女が伊余に軽の太子を追つていく

八八、八九…… 伊余で心中

前述したように密通後の歌である七九の後に、その密通の露見を語る言葉は見当たらない。そのため露見・非露見という議論が沸き起こることとなったのだが、それは語る必要性を有しなかったという見方も可能となるのではないだろうか。

そこで小稿では、大浦論を肯定的に受け継ぎながら軽太子をめぐる物語に別の観点を導入したい。具体的には、歌謡七八・八二に特徴的に用いられている「下」という言葉に着目することで、軽太子に対して付与されたヘイメージ^⑧について検討する。そして、新たな解釈の可能性について探求するものである。

二、軽太子に「下」と歌わせることの意味

軽太子は允恭天皇が崩御し、自身が「未だ位に即かぬ間」に軽太郎女との密通事件を起こす。その際に読んだとされるのが次の七八の歌謡である。

あしひきの 山田を作り 山高み 下樋を走せ 下訪
ひに 我が訪ふ妹を 下泣きに我が泣く妻を 今夜こそは 安く肌触れ（七八）

物語の最初に据えられた七八は「あしひきの 山田を作り 山高み」と、山が高いために」という言葉から「下樋

を走せ」と繋げ、「下訪ひ」「下泣き」という言葉を導き出す。「下」+「○○」という言葉が連続して用いられており、否応なしに「下」という語に注目を集めさせる形式をもっている。それは『日本書紀』において同じ状況下で軽太子が詠んだとして記されている歌謡と比較するとより明確である。

あしひきの 山田を作り 山高み 下樋を走しせ 下泣きに 我が泣く妻 片泣きに 我が泣く妻 昨夜こそ 安く膚触れ(紀六九)

『日本書紀』では5・6句目の「下泣きに 我が泣く妻」を、7・8句目において「片泣きに 我が泣く妻」と言い換えることで対句的表現にし、「我が泣く妻」という恋慕の対象である相手を強調するものとなっている。

しかし『古事記』では「下樋」から導かれる5句目以降は「下訪ひに 我が訪ふ妹 下泣きに 我が泣く妻」であり、そこには「訪ふ」から「泣く」への主体の状態の変化を見ることが可能である。

最初の「下」である「下樋」は『万葉集』に次の2首を見ることができ、

琴取れば 嘆き先立つ けだしも 琴の下樋に 妻や隠れる(万七・一一二九)
水鳥の 鳴る住む池の 下樋なみ いぶせき君を 今

日見つるかも(万十一・二七二〇)

一二九の「琴の下樋」は、琴の胴体部にある空洞を指す言葉とされており、二七二〇では「いぶせき」を導くために「下樋」が用いられ、その歌意を、「池の水を通すための埋められた樋のようにひっそりと表に出ないように」とする。2例、いずれの場合でも「下樋」は表面には露出しない空間のことを指しており、特に二七二〇は「下樋なみ」と「そのように隠れてひっそりと」といった、潜めようとする感情が仮託されていることに注目される。

また次の「下訪ひ」は『万葉集』や『日本書紀』には見ることができず、『古事記』の中でもこの七八だけに用いられた特有の言葉である。しかし、前述したように、この言葉を導く「下樋」には、「隠れてひっそりと」という意味がある。「下訪ひ」はそのイメージを引継ぐ形で配置させられていることから、そこには必然的に「表に出ないようにひっそりと」するイメージが含まれている。それゆえ、「下訪ひ」は「表に出ないようにひっそりと訪れる」「我が訪ふ妻」となるのである。

続く「下泣き」という言葉は、記七八・八二、紀六九・七一にだけ詠まれているものであり、「下訪ふ」とはまた異なるが、この軽太子をめぐる物語に特有の表現といえよう。前掲した『日本書紀』六九では「下樋を走しせ 下泣

きに」と配置されており、「下樋」が「下泣き」を直接導いている。一方の『古事記』では、「下訪ひに 我が訪ふ妹 下泣きに 我が泣く妻」と「下訪ひに」と「下泣きに」が対句的に並列されている点を考えると、「下訪ふ」と同様に「下樋」のイメージを受け継ぐものであるはずだ。この言葉は「表に出ないようにひっそりと泣く」となる。

ところで、七八は前述したように「下」+「○○」という語句を連続して用いることで、その注目を「下」に集めさせる。それは、この「下」という語が所有している意味なりイメージなりを歌の中に取り込もうとする意図があったことを示すものではないだろうか。例えば、次のように『万葉集』には「下」+「○○」という語句が多く存在する。

天雲の たなびく山の 隠りたる 我が下心 木の葉
知るらむ (万七・一三〇四)

藤波の 咲く春の野に 延ふ葛の 下よし恋ひば 久
しくもあらむ (万十・一九〇一)

湊葦に 交じれる草の しり草の 人皆知りぬ わが
下思ひは (万十一・二四六八)

あまたあらぬ 名をしも惜しみ 埋もれ木の 下ゆそ
恋ふる 行くへ知らずて (万十一・二七二三)

隠り沼の 下ゆ恋ひ余り 白波の いちしろく出でぬ
人の知るべく (万十二・三〇二三)

いずれの「下」もその心情を「ひっそりと表出しないように秘めた」と歌い、心の奥に秘めた「思ひ」や「恋」の歌に作り上げる。そこには恋愛の当事者以外には知られない、隠すべきものの存在が「下」に込められているのだ。

また、二四六八や三〇二一のように「人皆知りぬ」「人の知るべく」という句と用いられることで、「私がひっそりと思っていたことを皆が知ってしまった」「や、ひっそりと恋親しんでいたのに人に知られてしまった」と、隠すべきことが露見してしまったと歌う。しかしここで重要な点は、歌意どおりに恋が露見したことを歌ったとするだけでなく、秘すべきはずの気持ちが募りすぎて隠し切れなくなったことを歌っているという点だ。つまり、反証的に歌うことで、相手を思う感情の強さをより強調するという歌詞の形式が存在するということである。

ここで再度七八を見てみると、『古事記』は物語の冒頭において、恋愛（この物語においては密通）の当事者である軽太子に、「下訪ふ」「下泣き」という「人に見つからないようにひっそりと」という秘匿されるべき行為を歌わせている。それは、それらの行為が秘匿すべき行為であると当事者の軽太子は認識しているということだ。散文においては「姦」と記される関係であることを軽太子は最初から理解して密通に及ぶのである。その上で『万葉集』の

「下」の歌群に見られるように隠し切れなくなったほどの感情を歌いあげる。

以上のように「下」+「○○」という歌謡を中心に見てきたが、この「下」という言葉はその歌の中に、関係を知られてはならない「人」を詠みこむことが多い。この点について石田千尋は「人」第三者に知られることを懸念したり思い余って「人」の知るところとなったことをうたう類型的発想の歌が多いことも特徴である。「人」の語を用いない二七二三のような歌も、発想としては「人」への意識をふまえたものと見てよいだろう⁽⁹⁾とする。これに則れば、七八は「人」という言葉を使用していないが、そこには想定されるべき、関係を知られたくない「人」が存在するということになろう。では、それはいったい誰であるべきなのだろうか。

三、軽太子における「人」

笹葉に 打つや霰の たしだしに 率寝てむ後は 人は離ゆとも

愛しと さ寝しさ寝てば 刈薦の 乱れば乱れ さ寝

しさ寝てば(七九)

軽太子は「下」の恋を詠んだ七八の後に「又、歌ひて曰はく」という一語を挟んで、「人は離ゆとも」とうたう。

問題は、この「人」がいったい誰を指しているものなのか、という点である。

土橋寛は独立歌謡では「しつかりと率寝ることができたら、あとでその人が離れて行こうとも、ままよ」と詠まれていたであろう歌が、物語に取り込まれた際に意味の変遷があつたとして、次のように解釈をする⁽¹⁰⁾。

物語を背景として見ると、たとえ仮定であっても、軽太郎女が離れていくことを予想する余地はまったくないから、この歌のあとにある「百の官や天下の下の人等、軽太子に背き」という事態を予想した言葉と解される。つまり物語歌としては、「人」は百官や天下の人々をさしていると解される。

一方、新編古典文学全集の頭注は次のように説明している。「人」は思う人という。後の物語と合せて、「人」を百官・天下の人々の意にとる説があるが不適。「離ゆとも」の後に「それでもよい」という気持を補ってみるべきもの。十分に共寝ができた後は別れるようなことになつてもよいと、会つてなお飽かぬ思いを述べる。

「思う人」はこの場合、軽太郎女を指すのだろうが、土橋が言うように、捕えられた後にも八三で「確々にも 寄り寝て通れ」とうたう軽太子が「後は別れるようなことにな

「つてもよい」などというだろうか。新編古典文学全集は八三の頭注では「笹葉に」の歌（七九番）と対応し、共寝など不可能な状況の中でおこう言うことによって、変らない恋着を表す」としているが、捕えられた後も七九の時と「変わらない恋着」を八三で「寄り寝て通れ」と表すのであれば、七九で「別れるようなことになってもよい」とあるのは不自然だ。「寄り寝て」と、「離ゆ」はまったく逆の意味を持つ言葉である。捕えられても軽太郎女に自身の変わらない気持ち「寄り寝て」と表現する軽太郎が「別れるようなことになっても」とは歌わないだろう。しかし、かといって「百の官及天の下人等」と簡単に接続されてもよいものでもない。歌のみを見た場合、その明言はされていないからだ。

この問題について井ノ口史は『万葉集』の用例をあげ、「人」という語自体としては愛人を指すとも、第三者を言う語としても受容「可能としたうえで、「第三者としての「人」への視線を、「軽太子物語」に見出すべき」と述べる^①。また石田は「人」は大郎女とも第三者とも読めてくると考えるのではないだろうか。歌から歌へと連鎖する主題に照らせば、歌の表現は語意がそうした二様に読みうる方向に読み手を導いている^②と主張する。しかし、前述したように、捕えられた後も「寄り寝て通れ」とうたう

軽太郎は、共寝の後に軽太郎女が離れていくということを想定していないと見るべきで、「人」を大郎女として読むことは適切ではないだろう。

やはりこれは井ノ口の言うように第三者としてみるのが良いのではないだろうか。そもそも「人」という言葉を読み込む歌は『古事記』中に八首見られるが、いずれも「他人」や「人間」、そして第三者の「他者」としての「人」の意で用いられる。特に同じ允恭記では八二に「人」が詠まれる。

天廻む 軽の嬢子 甚泣かば 人知りぬべし 波佐の
山の 鳩の 下泣きに泣く（八二）

ここで詠まれている「人」は当事者である二人以外の他者の「人」であろう。前節において述べたように、秘匿すべきことという意味性を持つ「下」は「人」を読み込むことが多い。当事者以外の人物や外部が想定されるからこそ、秘匿や隠すという言葉につながるのである。そのため「下」に対応する「人」は当事者以外の第三者＝他者でしかありえない。

その関係が秘匿すべき密通であることを示すために「下」を繰り返す七八と「又、歌ひて曰はく」という言葉を挟んだだけで記載される七九は、七八の「下」の影響下にある。そのため、「人は離ゆとも」は当事者である軽太

子と軽太郎女以外の存在と理解される。ここにおいて軽太郎は軽太郎女との恋愛にのみ重点を置き、他者を顧みることのできない人物であることを露呈する。

そもそも允恭記は系譜記事に次いで、即位の経緯と軽太子をめぐる物語を記すが、その允恭天皇は次のように、臣下の推戴によって即位するのである。

天皇の辞びて詔ひしく、「我は、一つの長き病有り。日継をしらすこと得じ」とのりまひき。然れども、大后を始めて諸の卿等、堅く奏すに因りて、乃ち天の下を治めき。

「人は離ゆとも」とうたつてしまふ軽太子との落差は明らかである。¹³この点について、神野志はこれを天皇の世界が「いかに正統に継承され、充足を保ってきたか」という「主題」を下巻自体が負うとし、それを端的に「臣下との関わり（推戴）」においてある天皇は、臣下・人民との関わりに足りた天下をあらしめる天皇は、臣下・人民との関わりにおいて立たねばならぬ¹⁴としている。また、大浦も「允恭天皇崩御の後、太子として即位の定まっていた軽太子が廃太子となり、弟の穴穂が安康天皇として日継を継承する、その日継の正統性を語ることにこの歌謡物語の意図があったことは動かないだろう¹⁵」として、この物語が天皇の正統性を語り、廃太子の正当性を語るものであるとしている。

前述したようにこの歌謡における「人」は当事者以外の第三者＝他者である。七八で自ら「下」＋「○○」と歌う軽太子は軽太郎女との恋愛にのみ重点を置く人物であり、他者を顧みるような人物としては描かれていない。そんな軽太子にとつては第三者である「人」は「離ゆ」となってしまうてもよい存在であり、まさに廃太子としてふさわしく、反証的に天皇の正当性を語る存在として造形されている。

四、分析を通して見えてきた軽太子

『古事記』は天皇の正統性を語る一連の物語である。その中におかれた軽太子をめぐる物語は、一見すると心中をかたる悲劇となっているが、その実態はやはり天皇の正統性を語るものなのだ。太子として定まっていた軽太子は七八で「下」を、七九で「人」を歌に詠み込む。二節でも述べたように、「下」は「人」という言葉を導き出すが、それは一つの類型であり、相手への思いの強さを強調するという効果がある。重要なのは、外部に知られてはならないような関係を太子が持ち、それを「人は離ゆとも」と太子自身が歌うということである。

軽太子は物語冒頭で「下樋を走せ 下訪ひに 我が訪ふ妹を 下泣きに 我が泣く妻を」とうたう。『古事記』が

書かれた時代において「下」+「○○」と詠まれる語句は連結する言葉との間に、当事者以外には秘匿にされるものというイメージを付随するものだった。物語の読み手は、当事者以外に秘匿すべきような行為を太子が行っているを受け取っただろう。そしてその関係に対し、「人は離ゆとも」とうたいあげる。「下」と連動する「人」は秘匿すべき行為者以外の外部をさし、第三者をさす。太子という立場にある者が「人」=第三者や他者に対し「離ゆとも」とうたうことで、軽太子は必然的に「百官と天の下の人等」に背かれ、廃太子となるのである。そこには密通の露見・非露見以前に、第三者や他者を顧みることができずに、軽太郎女との恋愛を優先する軽太子という人物の根本的な問題点が描かれている。それゆえに皇位争いの敗北、廃太子は必然として描かれた。

分析を通して見えてきたのは、軽太子をめぐる物語が読者との関わりにおいて、生成し続けるテキストであるということだ。「下」+「○○」は『万葉集』に見られたような一連の類歌がある。秘匿すべきものという意味合いを含ませ、そこに当事者以外の外部の「人」を想定させる。軽太子をめぐる物語において「人」が指定されたとき、軽太子が太子であるがゆえに「人」は大きな意味をもって受け止められただろう。これはおそらく『古事記』が人々に受け

入れられるためにとりうる手法の一つであり、『古事記』全体に関わる問題のひとつと考えられる。

注

(1) 以下、本論文中の歌謡の歌番号、また数は小学館新編日本古典文学全集『古事記』に従う。

(2) 土橋寛は『古代歌謡全注釈 古事記編』（角川書店、一九七二年一月）において「二人の仲はすでに人々に知れ渡って今追われているのであるから、今さら「甚泣かば人知りぬべし」などと言うはずはない」とした上で、「独立歌謡を物語化」したものと解釈する。

また、山路平四郎も「木梨之軽太子物語について——古代物語の形成と展開——」（『早稲田大学大学院文学研究科紀要』12 一九六六年十二月）の中で八二番歌を「軽市のカガヒに関連した歌謡が原歌だと考えてまず誤りはあるまい」とする。

(3) 神野志隆光「軽太子と軽太郎女の歌謡物語について」『論集上代文学』一四冊 一九八五年六月 笠間書院

(4) 身崎寿（「軽太子物語——『古事記』と『日本書紀』と——」『古事記研究大系9 古事記の歌』高知書店 一九九四年二月）や都倉義孝（『歌謡物語・『古事記』軽太子物語を読む』『日本文学史を読む①古代前期』有精堂出版、一九九〇年四月）、阪下圭八（「軽太子・軽太郎女の物語——『古事記』・『日本書紀』の方法と表現——『国語と国文学』六八巻五号、一九九一年五月）らによる批判を、神野志は「古事記の悲恋——軽太子・軽太郎女の物語」（『悲恋の古典文学』世

界思想社、一九九七年十二月）において再反論している。

また、新編全集『古事記』の頭注では「兄妹相姦が露見して人々が背いたとるのが通説だが、誤っている。八二番の軽太子の歌は二人の関係が露見していないことを示す。」と記している。

(5) 前掲注(4)身崎論文。

(6) 大浦誠士「『古事記』軽太子歌謡物語の「読み」——テキスト構造の問題として——」『国語と国文学』九〇巻五号二〇一三年五月

(7) 山路平四郎は前掲注(2)論文において「第一部は親親相姦を語るもの(中略)第二部は「是を以ちて百官及天下人達、軽太子に背きて穴穂御子に帰りに」に始まり、大郎女が「衣通王」の名で登場する前までの処(中略)第三部は大郎女が「衣通王」の名で登場する以下の部分」としており、本稿もこれに依拠する。

(8) この点については、石田千尋が「冒頭四句が「下」の序という以上にトフという行為に至るまでの経緯の寓意として読める」(『古代歌謡と物語——『古事記』軽太子の歌の場合』『国文学』解釈と教材の研究』四五巻五号、二〇〇〇年四月)と述べており、状況説明という機能が七八の歌謡には持たされているとしている。

(9) 前掲注(8)

(10) 注(2)土橋寛『古代歌謡全注釈 古事記編』による。

(11) 井ノ口史「『古事記』「軽太子物語」論——歌謡79の解釈をめぐって——」『京都語文』十五号、二〇〇八年十一月

(12) 前掲注(8)。

(13) この点においては、後の安康天皇である穴穂御子が大前小

前宿禰の進言「いろ兄の王に兵を及ること無かれ。若し兵を及らば、必ず人、咲はむ。」を受け入れたことも比較される。

(14) 前掲注(4)神野志論文。また、他にも仁德天皇や反正天皇、仁賢天皇の例をあげ、「臣下・人民との関わりにおいてありつつ正統性を保つべき下巻の天皇たちの問題」が確かめられるとしている。

(15) 前掲注(6)

付記

本論文中の『古事記』の引用は小学館新編日本古典文学全集『古事記』に依った。また『日本書紀』の引用は小学館新編日本古典文学全集、『万葉集』の引用は岩波書店新日本古典文学大系に依る。